
全てはくまから始まった

はっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てはくまから始まった

【Nコード】

N9425B

【作者名】

はっぴ

【あらすじ】

黒の組織を壊滅し、コナンは無事新一へと戻った。そして月日はたち、大学生となる。新一はそこで、自分と同一ような瞳を持つ同い年の人と出会う。その名は黒羽快斗。でも、会うのは初めてではないようなそんな気がしていた。コナンだった時も会っていた、そんな気がしていた。笑&恋をメインとした、友情物語です☆恋模様は、新×蘭・平×和・快×青・ほんのりコ×哀です。原作とは少し違和感があるところがあると思います。ご理解頂ける方のみ、ご覧下さい。

1, 幼き頃

「ねえ、一緒に遊ぼうよ」

「うん、いいよ。一緒に遊ぼう！」

色んな子供がワイワイ楽しく遊ぶ公園。

すべり台や砂場、ブランコやシーソーなどと色々な遊具がある。

その中のジャングルジムのとっぺんで、1人の少年が隣にいる少年に話しかけた。

小さな2人の少年は、だいたい4才位であろう。

2

2人の少年は、小さな体でせつせとジャングルジムから降りて行き、下まで降りると近くのベンチに座った。

結構ねんきが入った、木で出来ているベンチだ。

でも、すごく丈夫でかなり大きい。

小さな少年2人が座るのを見ると、ベンチがもっと大きく見える。

数秒の間があいてから、1人の少年が言った。

「俺、黒羽快斗って言うんだ！」

「俺は、工藤新一！よろしくな」

「うん、よろしく！」

2人は数秒見つめ合ったあと、満面の笑みを浮かべた。

そして2人の目には、キラキラ輝く大きな瞳がやどっていた。

「なあ新一、砂場で大きな山作ろう！」

「うん！いいよ快斗」

初めて出会ったにもかかわらず、たった数分前に出会ったにもかかわらず、2人はお互いに名前で呼び合っていた。

そして、砂場へとタッタと走っていき、さっそく砂の山作りに取り掛かった。

2人は、大きな大きな砂の山を作るために、色々と工夫をしながら

楽しそうに砂の山を作っていく。

例えば、土を水でぬらして硬い土にしたり、場所によってはサラサラの柔らかい土をのせたりとして、新一と快斗は大きな砂の山を作っていた。

どんどんと、大きな砂の山が出来てくる。



公園内に、5時を知らせる音楽が鳴り始めた。

ここの公園は、5時になると音楽が流れて教えてくれる便利な公園。

しかも5時だけではなく、午前12時・午後3時・午後5時・午後6時の時間にも音楽が流れる。

音楽が流れる公園は、ここの他にはあまり無いであろう。

5時を知らせる音楽が流れると、公園内にいる子供達は友達と帰っていったり、子供を迎えに来た親でいっぱいだった。

その中には、新一と快斗の親も含まれる。

「新ちゃん」

「快斗」

2人は砂場にある砂の山をチラッと見ると、砂場を離れて自分の親の元へと駆けていく。

親が迎えに来た頃には、砂の山はとても大きな立派な山となっていた。

新一と快斗の身長の下半身位まで高さ位、余裕にありそうだ。

でも、2人はそんな立派な砂の山を残してタッタと自分の親の元へと駆けていった。

「それじゃあ新ちゃん、帰りましょ♪」

「うん」

新一は、ニッコリ笑って有希子の顔を見上げる。

そんな新一の顔につられて、有希子もニッコリと笑った。

「じゃあ、帰ろうな快斗」

「うん」

快斗は、ニコツと満足げな笑みをしながら盗一を見上げた。

そんな快斗の顔につられて、盗一もニコツと笑う。

そして新一も快斗も公園から出て、自分の家の方向へと足を向ける。

新一と快斗、お互いに反対の方向に進んでいく。

2人の背中と背中が顔を見合わせ、自分の目と目は自分の帰る方向へと真っ直ぐに向いていた。

でも、真っ直ぐ向いていた目は、クルンと後ろを振り向いた。

新一と快斗は、同時に後ろを振り向き、それと同時に大きく息すう。

「明日も来るから」

2人はそう言うと、お互いに笑顔を見せてまたお互いに背を向けた。

今度こそ、目は真っ直ぐと進む方向へと向いている。

そんな様子を見た、新一の親「有希子」と快斗の親「盗一」は、お互いの目を見て軽く頭を下げて挨拶をする。

そして、一足はやく前を向いている自分の息子とともに、また歩き出す。

当然のごとく、2人の親は自分の息子に聞いた。

「ねえ新ちゃん、新しいお友達？」

有希子は、一度後ろを振り向いた。

「うん！あのね、公園のジャングルジムのところでお友達になった、黒羽快斗って子だよ」

「へえーそうなの！良かったわね、新ちゃん」

新一はニツと笑う。

いかにも、「いいでしょ」と自慢をするような顔で笑っていた。

有希子も、そんな新一の顔を見て自然と笑みが浮かんでいた。

「なあ快斗、あの子は誰だい？新しい友達か？」

盗一は、一度後ろを振り向いた。

「あのね、公園のジャングルジムのてっぺんで友達になった、工藤新一って子だよ♪」

快斗は、瞳をキラキラと輝かせながら口を動かした。

「そうかく良かったな快斗、友達が増えて」

「うん！」

快斗はニヒヒと笑った。

そんな快斗を見て、盗一も思わずニヒヒと笑った。

新一と快斗は、次の日もその次の日も……。

毎日毎日公園に行って遊んでいた。

また、砂場で大きな大きな山を作ったり、たった2人なのにかくれんぼをしたり、鬼ごっこをしたりと2人だけでも随分と充実した遊びをしていた。

そのたびに、新一と快斗の服はドロコンまみれになり、ちよつとだけ新一は有希子に快斗は盗一に怒られたこともあったけど、そんな

ことは気にしてられない。

今も見せ付けるように、服をドロコンコまみれにして堂々帰っていく位だ。

そして、新一と快斗がいつもいつも仲良く一緒に遊ぶため、有希子と盗一も良く話すようになっていた。

そんな会話の中では、優作と盗一が知り合いということも分かり、休日も新一や快斗付きで遊びに行くようにもなっていた。

—そんなある日—

新一と快斗は、ジャングルジムのてっぺんまでのぼった。

「あのね、新一に渡したい物があるんだ」

「渡したい物？」

快斗はそう言うと、スボンのポケットに手をつ突っ込んで2つの小さな紙袋を取り出した。

「はい」

快斗は、2つの紙袋のうちの1つを新一に渡す。

もう1つの紙袋は、自分の分のようだ。

新一は、それをそっと受け取りまじまじと見つめた。

白い小さな紙袋だった。

その白い小さな紙袋には、黒い色で「THE 手作り屋」と書かれている。

多分、紙袋の中身を買ったりなんだりしたお店の袋だろう。

だが、まだ4才の2人には英語も漢字も読むことができない。

読めるのは、「THE 手作り屋」の「り」だけである。

「ねえ新一、開けてみてよ！」

「うん！」

新一は、ドキドキと胸を高鳴らせながら紙袋の封をゆっくりと開けた。

紙袋の中に入っていたのは、可愛いくまのキーホルダーだった。

茶色のフェルトで出来ているようだ。

目と鼻の部分は、黒いビーズで出来ていてクリツとしていてとても可愛い。

しかも、手と足が自由に動かせるようになっている。

そして、くまの体の部分には「しんいち」をローマ字で書いた時の頭文字、「S」のマークが入っていた。

「可愛い！」

「だろお♪俺も持ってんだよ」

快斗は自分の分の紙袋を開けた。

中には、新一と同じくまのキーホルダーが入っていた。

でも、くまの体の部分には「S」ではなく「かいと」をローマ字にした時の頭文字「K」のマークが入っていた。

新一と快斗は、お互いのくまのキーホルダーを見合いながらニコツと笑った。

「快斗、本当にもらっているの？」

「もちろん！新一のために俺が考えて作ってもらったキーホルダーなんだから♪」

そう、このくまのキーホルダーは世界に2つしか存在しない貴重なキーホルダーなのだ。

それはなぜかというと、「THE 手作り屋」というお店は、自分がアイデアしたものを紙などに書いてお店に持っていくと、できるものならそのとおりに作ってくれるのだ。

つまり、快斗は自分でデザインしてお店で作ってもらったということだ。

「ありがとう、快斗」

新一は、くまのキーホルダーを高々と上に上げながら言った。

快斗も満足げな笑みを浮かべている。

でも、数秒経つと快斗の顔は、満足げな笑みから真剣な顔に変わっていた。

「新一」

「何？快斗」

快斗は、何かを言おうとしたが一旦口を閉じ、下を向いた。

だが、何かを決意したようにパッと顔を上げて、真剣な瞳で新一を見つめた。

「快斗？」

快斗の真剣な瞳を見て、新一の頭には不安がよぎる。

新一は無意識のうちに、ゴクツと唾を飲み込んでいた。

「あ、あのさ……俺と新一って、何処に行っても友達だよね？」

快斗は真剣な瞳でありながら、悔しい・悲しいの2つの言葉が入り混じったような表情を新一に向ける。

「……………もちろんだよ、快斗！俺達は何処に行っても友達だよ」

「……………だよな」

快斗はニパツと笑う。

でも、そんな快斗の顔にはまだ、寂しそうな表情が残っていた。

そんな表情を新一が読み取ることを出来たのか、それは新一自身にしか分からない。

「大切にしてね、くまのキーホルダー」

快斗は、新一が持っているくまのキーホルダーをつんつんと人差し指でつつきながら言った。

「もちろん♪ずっと大切にするよ」

今度は、新一が快斗の持っているくまのキーホルダーをつんつんと人差し指でつつく。



おなじみの、5時を知らせる音楽が流れ始めた。

すると、公園の入り口から有希子と盗一が一緒に入ってくる。

何かを話しながら、新一と快斗がいるジャングルジムに向かって歩んでいく。

話している内容は分からないが、2人の顔は悲しい表情をしていた。

「新一、行こう」

「うん」

2人はせっせとジャングルジムから降りて行き、めいいっぱい笑顔で自分の親の元へと駆け寄って行った。

「新ちゃん、楽しかった？」

「うん！」

新一は、一度思いつき高くジャンプをした。

それほど楽しかったのであろうか、快斗からプレゼントが嬉しかったのか。

やはり、それは分からない。

「快斗、今日も良く遊んだな」

「うん！」

快斗は、目には「寂」の文字が浮かんでいたが、それでもめいっぱいの笑顔を見せていた。

それぞれ、自分の親と話し終わるとクルリと体の向きをかえて、お互いの目と目を合わせる。

「また、絶対に遊ぼうね新一」

「うん！遊ぼうね、快斗」

2人はそれだけ言うと、お互いに手を振りながら自分の帰路につく。
やがて、お互いの顔が見えなくなっていく。

小さく、小さくなっていくのが見える。

いつもならもう背中と背中を見せて真っ直ぐ歩いていのだが、今日は違った。

ずっとずっと、手を振って声を掛け合っていた。

でもお互いに相手の姿が見えなくなると、新一も快斗もしっかり前を向いて歩き出した。

（いつか絶対、また遊ぼうな。新一）

（また明日、絶対に遊ぼうな。快斗）

そう、心の中で思いながら2人は家に向かってどんどん、
と歩いていった。

キラキラと輝く瞳を、真っ直ぐに向けて進んでいく。

次の日も、その次の日も、そのまた次の日も。

新一は公園に行った。

だが、快斗が公園に来ることは一度もなかった。

そしていつしか、そんな幼き頃の思い出は2人の頭から消えかかっていた。

あの、くまのキーホルダーのことも。

お互いが公園で遊んだことも。

楽しくて、楽しすぎて毎日毎日笑みがこぼれていたことも。

全て。

1, 幼き頃（後書き）

読んでくださった皆様、ありがとうございます☆

まだ連載ものがあると言うのに、新しい物語を投稿してしまいました……。ですが！（。D。）！しっかりと両立して頑張っていきたいと思っているので、温かい目で見えてあげて下さいネ（笑）
（ハ－ハ＊）（ハ－ハ＊）／

「全てはくまから始まった」の更新のスピードは『ゆっくりゆっくりマイペース』です。（。・（エ）・。）
なので、ゆっくり更新させて頂きますので気長に待っていてももらえれば嬉しいです♪

今回のお話は、どうでしたでしょうか？
そしてここで、皆様に1つ質問です。

最初にジャングルジムの上で声を掛けたのは、新一と快斗のどちらだと思いますか？（。っ・D・）っ？
ですが、ここは皆様のご想像におまかせします♪

では、評価&感想お待ちしております。
そして、これからも宜しくお願いします！d（ゝV・＊）

2, 2人が歩む道

「新一、ねえ新一てばあ！」

「あんだよ、さっきから」

雲1つない、青空。

サンサンと降り注ぐ太陽の光。

その下で、いつものような会話が繰り広げられていた。

「新一！」

「なんだよ蘭。さっきから新一新一うるさいんですけどー」

新一の言葉に、蘭はプクツと頬を膨らませる。

「なんだよってねえ、あたしの話し聞いてたの？」

「……………」

新一は何も言わず、雲1つない青空を見上げた。

太陽の光に、目を細める。

「いや〜今日は良い天気ですねえ」

「ほ〜らっ！新一ったら、やっぱり聞いてなかったのね！その無言が語ってるわよ」

「ほ〜いよっ！スママセンでした」

新一は、今だに頬をプクツと膨らませている蘭をよそに、そこらへんに落ちている石を思いっきり蹴り飛ばした。

その石は、コロンコロンと転がっていき、草の陰で止まった。

「かわいそう、新一に蹴られた石」

「うるせえ」

2人……新一と蘭は今、正確に言うところから大学生になった。

大学名は「帝丹大学」という。

もちろん、新一と蘭は同じ大学。

ちなみに、園子も同じ大学だった。

そして今はその帝丹大学の入学式の帰り道である。

「とうとう、大学生だね」

「ん？ああ、そうだな。つーか何おばさんみたいなこと言ってんだよ」

「ん？なんか言った!？」

蘭は、ムツと顔をしかめた。

その顔を新一にグイグイ近づけていく。

新一はまったく気にしていない様子だが……。

「あつ、じゃあ俺こっちだから……またな、蘭」

と、何事もなかったように手を振ってくる新一に対し蘭は

「えっ!？あ、ああうん……またね、新一」

と、今までのことは綺麗サッパリ忘れて、笑顔で手を振り替えた。

新一は、自分の家に向かって真っ直ぐと歩いていく。

当たり前だが、いずれ工藤邸に到着する。

新一は、工藤邸のドアの前に立って鞆の中をガサゴサとさぐり始めた。

探しているもの、それは工藤邸のドアを開ける鍵。

新一は、いたるところまでドンドン手を突っ込んでいく。

鞆についている小さなポケット、底のほうと手を突っ込む。

やっとのことで鍵を見つけ出し、鍵穴にグサッと鍵を差し込む……
……が、おかしい。

家の鍵が、開いている。

家を出る時は、ちゃんと鍵を閉めたはず……なのに開いている。

しかも、銀色のポストに入っていたはずの新聞がない。

それに、雑草がぼうぼうだった庭も綺麗に掃除されている。

し・か・も、部屋の明かりまでもがついている。

新一の脳裏に、ある2人の顔が浮かんだ。

「ふうー……」

と、新一は深呼吸をする。

そして、ドアノブに手をかけてゆっくりとまわし、勢い良くドアを開けてリビングまで突っ走る。

パンツ！

パーンッ！！

リビングに入ったとたんに、部屋中にクラッカーの音が鳴り響いた。クラッカーの中身が、ヒュラヒュラと床に舞う。

「なっ……」

新一は、顔をひきつらせた。

ドツと手から鞆がずり落ちる。

「新ちゃん、おかえり〜♪」

「おお新一、久しぶり！」

なんとも、のほほんとした顔で有希子と優作が出迎えた。

有希子と優作は、のほほんとしながらも満面の笑顔で出迎えていた。

そして新一との距離は約1mだというのは関わらず、フリフリ手を振る。

それとうって変わって新一は、苦笑いを浮かべていた。

「おかえり〜♪って……久しぶり！って……なんで2人がここにいるんだよ！」

クラッカーの音に負けず、新一は大声出す。

そんな新一の顔は、「怒」「悲」「楽」「笑」が入った複雑な顔をしていた。

まあ、一言ですませば「喜怒哀楽」なのだ。

有希子は新一が大声を出したと同時に、手で耳をパツとふさいだ。

優作もムツと顔をしかめる。

「もお、そんなに大声を出さなかったって良いじゃないの！」

「そうそう、それにここは工藤邸だぞ新一？父さん達がいたって別におかしいことはない」

優作は、フツと得意げに笑った。

有希子も優作に負けず、うんうんと頷きながら得意げな顔をした。

「まあ、新ちゃん♪そういうことだから」

「ハハハ……」

新一はまた、苦笑いを浮かべる。

新一が持っていた鞆が新一に同情するように、新一の足元にパタリと倒れた。

有希子と優作が工藤邸に帰ってきたのは、丁度新一が大学に行っている頃。

その時にはもう持ってきた鞆などは片付けてしまい、息子の帰りを楽しみにして待っていたようだった。

新一は諦めたように、「ハア……」と一息ついてから、近くの椅子に座る。

「んで、何で帰って来たんだよ？あと、いつ帰るの？」

と、新一は興味なさうにその辺にあるものを、キョロキョロと見ながら言った。

それもそうだ、辺りが綺麗に掃除されているのだから。

それに、ダンスなどの配置が少し模様替えをされているような気がする。

「あら、私達は外国に帰るつもりはないわよ」

「ああそう、もう帰らないのね………ってはあ!？」

新一はパツと顔を上げて、また大声を出した。

「ハッハッハ、新一も反応が鈍くなったものだなあ。関心、関心」

「関心してる場合じゃねーだろうっ！つか、んなことで関心するな」

本気で納得する優作に、新一が呆れた顔で突っ込みを入れる。

もちろん、突っ込みの時の手はついていない。

「で、何？ずっとここに住むわけじゃねーだろうな……………」

「流石新ちゃんね、その通りよ♪ずっとここに住まさせてもらうつ
もりヨ」

新一は、目をパチクリさせる。

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ新一の思考回路がSTOPストップした。

「な、なんでだよ!？」

新一は、ガタツと音をたてて椅子から立ち上がった。

新一の口は、ポカンと開いている。

綺麗な丸の形で開いていた。

そんな新一をよそに、有希子と優作は緑色の湯のみでお茶を飲んでいた。

温かい緑茶のようだ。

湯のみからは、モワモワと湯気がたっている。

優作の眼鏡が、少しくもったように見えた。

「別にいいじゃないの、それにこれからは寂しくないわよ♪いつでもお母さん達がいるからね」

有希子はそう言って、緑茶を口の中に流し込んだ。

「あっ、茶ばしらだあ！やったわ」

有希子はガッツポーズを1人寂しくやった。

「なっ、寂しくなんかねーよ！それにどうせ、日本見学♪とか言うってほとんど家を開けるくせに」

「ハッハッハ、おい有希子新一にバレてしまったぞ」

有希子と優作は、新一を見てアハハ♪と笑いながら緑茶を飲み続ける。

新一は、顔を思いっきりしかめた。

でも、有希子と優作が笑うのを見て、しだいに新一の顔にも笑顔が浮かんでいた。

「あっ！そうそう新ちゃん」

「ん？」

有希子は、テーブルの上に置いてあった大きな茶色の紙袋を取り、新一の前に持っていた。

「何だよコレ」

新一は嫌な予感がしつつ、ポーカーフエイスを保って有希子に聞く。

「フフ♪あのね、部屋の中を掃除してたらで出来たのよぉ〜新ちゃんが小さい頃のアルバムとか」

新一の予感は、見事に的中した。

事件の真相が的中するのは良いが、嫌の予感を的中したときは何とも言えない気持ちになる。

「そうなんだよ、小学校の頃のあゆみとかプリント、テストも出て来てな♪」

「もおゝ笑いっぱなしで最高でした♪」

最後だけは、有希子と優作で見事はもらせながら、ニツコリと満面の笑みを新一に向けた。

プツ

何か、何かが今「プツ」っと切れた。

「……………何笑ってんだよ！たくっ自分の息子のもん見てゲラゲラ笑いやがってー！どーせそれを知り合いの人とかに、見せたりしゃべったりするんだろっ！！」

新一の何かが今「プツ」っと切れ、大音量の声が工藤邸に響く。

「たくつ、そんなのお見通しなんだよ！今までの経験上な」

新一は、「チッ」と誰にも聞こえないように舌打ちをした。

それほど、笑われて嫌なものでもあったのだろうか。

「や、やだあゝ新ちゃんったら♪そんなことするわけないでしょお」

「うんうん」

と冷や汗を垂らしながら笑顔で言う有希子に、優作も口裏を合わせる。

「……！！まさかもう、知り合いにしゃべりやがったな」

新一の鋭い瞳が、ビシッと有希子と優作に刺すように当たる。

「……………新ちゃん、ゴメンね？エヘッ」

有希子は、舌を一瞬出して謝る。

優作も……………優作は舌を出してはいなかったが、「スマン」と一言言って頭を軽く下げた。

「ふ、ふ、ふざけんなぁー!!」

今の新一の声は、間違いなくクラッカーの音よりも大きかったはずだ。

それでもちろん、工藤邸に大音量で響き渡る。

隣の阿笠邸にも聞こえていたかもしれない。

工藤邸の窓は、パツカリと全て開いていたのだ。

全開だった。

それならば、阿笠邸だけではなく通りすがりの人にも聞こえていただろう。

そしてもし、阿笠邸に聞こえていたら阿笠博士はどう思っただろうか。

「元氣じゃのお」とか。

「賑やかじゃのお」とか。

「新一はいつになっても、変わらんのお」とか。

そして、もし阿笠邸に住んでいる灰原哀が聞いていたら、どう思っ
ていただろう。

「騒がしいわね」とか。

「まったく、工藤君はいつになってもある意味バカね」とか。

「楽しいのは良いけど、近所迷惑よ」とか。

哀も博士も、それぞれそう思っていただろう。

そして戻って、工藤邸。

「はあ……」

思ったよりも大声を出すのに疲れたらしく、新一は椅子に座りな
おした。

「あつ、そうだそうだ……はい、コレ」

「ん？何だよ、それ」

有希子に渡されたのは、茶色いフェルトで作られている「くまのキーホルダー」だった。

新一は、有希子からくまのキーホルダーを受け取ると、くまのキーホルダーを高々と上に上げた。

そして、ジーっとくまのキーホルダーを見つめる。

「何これ、外国からのみやげ？俺こんなの要らないぜ」

有希子は小さく、「えっ」と呟いてから頬ををプクツと膨らませた。

「もお！それはお土産じゃないわ、新ちゃんったら忘れちゃったのお？」

「んなこと言われたって、覚えてないもんは仕方ねーだろ」

新一は、くまのキーホルダーを見つめながら顔をしかめた。

「そうかくそのキーホルダー、新一の一番の宝物だったんだぞ！休

みの日には、そのキーホルダーをくれた子の話しばっかりでさ、父さんだって話したいことあったんだぞ」

「ふーん」

新一は興味なそうに、そっけなく返事をする。

新一は、持っていたくまのキーホルダーをブラブラと揺らしだした。

そこまで、この話しに興味がないのであろうか。

「しょうがないわね、覚えてないんだったらこの^{プライベート}private^{アイ}yeの工藤有希子が思い出させてあげる」

新一は別にいいのにといいながらも、有希子の視線が痛かったので話を聞くことにした。

「ある日、公園に遊びに行った時に新一と同じ位の年の子と、お友達になったのよ。それで、お友達になったその子の名前は、黒羽快斗って言うの」

「黒羽快斗？」

新一は、あごに手を当てる。

そして、自分の頭の中を探っていたが、そんな名前の覚えはまったく無かった。

記憶のカケラすら、無いのだ。

「それで、快斗君と新ちゃんは毎日のように公園で一緒に遊んでいたわ。とても仲が良かったのよ！蘭ちゃんの遊びの誘いも断って遊びに行ってたんだから」

有希子は、机にあるぬるくなった緑茶をゴクツと飲み干した。

「でもね！ここからが大切なの……快斗君が新ちゃんにこのくまのキーホルダーを渡した次の日から、快斗君は公園に来なくなっちゃったのよ。それでも新ちゃんは毎日、毎日公園に行っていたけどね。いつか快斗君が公園に来るんじゃないかって……」

有希子の瞳には、ジワジワと涙が浮かんできていた。

「それで？その黒羽快斗ってやつはどうなったの？」

新一は、いつの間にかに有希子の話しに聞き入ってしまった。

優作も、真剣に聞いているような目つきを有希子に向けていた。

有希子は、うんと頷いてまた話し始めた。

「それで、快斗君が新ちゃんにくまのキーホルダーを渡している間に、快斗君のお父さんと話していたんだけど………快斗君はね、引越してしまったのよ。それで、公園にも遊びに行けなくなってしまうわけなのよ」

有希子は、しょんぼりとした顔を新一に向ける。

そんな顔をしながら、新一がずっと持っていたくまのキーホルダーを手を取った。

というか、無理矢理奪い取ったと言った方が正確だろう。

「快斗君ね、引越す前にこのくまのキーホルダーを渡したかったんだって。小さいながらも一生懸命を働かせて、くまのキーホルダーのデザインを作ったのよ。それをあるお店に持っていて作ってもらったんですって」

新一は、「へえ」とでも言うように、ものすごく納得した顔をして2回頷いた。

「それじゃあ、このくまのキーホルダーは黒羽快斗って人が自分でデザインしたんだな」

新一は、有希子が持っているくまのキーホルダーを懐かしそうに目を細めて見つめた。

「へえ、そんなことがあったんだな」

新一は、有希子に聞かせてもらったが何も思い出すことが出来なかった。

だが、くまのキーホルダーを見ると、何だか懐かしさを感じるようだった。

「どうだ、新一……何か思い出したか？」

3人の間に、数秒の間が空いた。

有希子と優作は、しっかりと新一の瞳を見つめている。

新一も、有希子と優作の瞳を交互に見つめた。

そして、額に冷や汗を垂らす。

「まったく、思い出せねえ」

「あっそ」

有希子と優作は、「やっぱりね」と言う顔をして新一を見つめた。

「坊ちゃま、坊ちゃま」

ある家の、ある一室で1人のおじいさんが大学生位の青年に話しかけた。

「ん？どうしたんだ、寺井ちゃん」

声をかけた主は、寺井と呼ばれる元気なおじいさん。

声をかけられたのは、今日晴れて大学生となった黒羽快斗。

「先ほど部屋を掃除をしておりましたら、このような物が………」

そう言って、寺井は自分の手にある物を快斗に見せた。

すると、快斗の顔にはほんのりと笑みが浮かんでいく。

「あっ、これ……」

「ご存知ですか？」

寺井が首を傾げると、快斗は子供のように「うん！」と頷いた。

「ああ、これはな……俺がデザインしたくまのキーホルダーなんだから
ぜ」

快斗は、くまのキーホルダーを高々と上げて見つめた。

茶色のフェルトで出来たくまのキーホルダーのようだ。

そして「フフッ」と笑いながら、懐かしそうな瞳でくまのキーホルダーを見つめていた。

新一との思い出を懐かしそうに、思い出しているのだろうか。

「世界に……世界にたった1つしかない、くまのキーホルダー♪」

やはり、覚えてはいなかった。

「ねえ寺井ちゃん、このくまのキーホルダー何処で見つけたの？」

快斗はくまのキーホルダーを見ながら、嬉しそうに寺井に聞いた。

「はい、隣の部屋のダンスの下でございます」

（はんつ、そんなところにあつたのか！探しても見つからなかったわけだ）

快斗は、心の中でそんなことを思いながらも、本当に嬉しそうにフンフンと鼻歌を歌い出した。

R
R
R
R
R
R
R
R
)

その時、快斗のズボンのポケットに入っている携帯がブルブルと震え出した。

「ん？」

快斗は、ポケットからブルブルと震えている携帯を取り出し、通話ボタンをポチッと押す。

「もーしもし」

快斗は、気がぬけたような声で電話に出た。

『あつ、快斗〜？あたし、青子だよ』

「ああ、青子ってことは分ってます〜で、何の用？」

電話に出ると、メチャクチャ元気な青子の声が聞こえてくる。

快斗は、相手には見えないことを良いことに、思いっきり呆れた顔をした。

『今日からあたし達、晴れて大学生になったでしょ？だから、一緒に大学に行こうよ』

「はあ？んなもん、1人で行けよ」

『…………ムツ…』

電話の向こうで、青子が頬をプクツと膨らませているのが良く分か

る。

快斗も「膨らんだな」と小さな声で呟いた。

『このバ快斗!』

突然、大声で青子が快斗に怒鳴りつけた。

快斗は思わず「ひいっ」と叫んでしまった位だ。

快斗は携帯を持っていないほうの手で、自分の耳を優しくさする。

「たくっ、うるせー! バカにバカなんて言われたかねーよ」

青子に負けずと、快斗も思いっきり携帯に怒鳴りつける。

『快斗がバカなんだから、しょーがないでしょ! それに、青子はバカじゃないもん』

「はんっ、こーやって言い合ってる俺等がバカなんだよ」

快斗は、自分にも青子にも呆れたような顔をして言った。

『……………そ、そうだね』

自分にも快斗にも呆れたのは、青子も同じであった。

まあ、要するに……快斗も青子も2人とも自分がバカだと認めしま
っているのだ。

2, 2人が歩む道（後書き）

読んでくださった皆様、感謝しています。

ありがとうございますゞ（＊。▽^＊） //

今回は、どうだったでしょうか？（。ー、ωー）

この「全てはくまから始まった」のお話しは、ものすごく文章に力を入れているのですが、どうですか？（＊、▽、）ノ
もちろん、お話しにも力をタップリ入れていますヨ☆
なので、文章についてのアドバイスなども大歓迎ですので、宜しく
お願いします。（＊ー＊）b

それと、評価&感想などに書く場合。φ（・ω・）

いちいち「全てはくまから始まった」と書くの大変だと思います。

な の で 。（●、（エ）、●）ノ

「全くま」とでも省略してもらって結構ですよ。

OK・＋。（○（。・d・。）○）・＋OK

ということで、これからも宜しくお願いします♪

3、違った出会い

どこにでもありそうな道の、どこにでもありそうな電柱柱の前で、
鞆をユラユラさせながら待っている女の子、中森青子がいた。

「悪い〜青子！」

大きな声を出しながら青子に向かって走ってくるのは、黒羽快斗。

家からずっと走ってきたのか、「はあはあ」と息を切らせながら今
も「悪い」と連発していた。

どうやら青子と快斗は、一緒に大学に行くことになったようだった。

「もお！遅いよ快斗、10分も遅刻」

青子は、プクツと頬を膨らませた。

「あゝ……寝坊！そう、寝坊したの俺」

と、なぜか冷や汗を垂らしながら快斗は言う。

目も、キョロキョロと動いている。

いつものポーカーフフェイスはどうしたのか。

「寝坊？明日は寝坊しないでよね。今日はこの青子様が特別に許してあげるんだから」

「はいはい、OKです」

快斗は「エヘッ」とでも言いそうな笑顔を青子に向けるが、頭の中では苦笑いをしていた。

（……寝坊なわけねえだろ。大事な大事な「怪盗KID」の服にしみつけちゃって、しみぬきしてたんだよ！たくっ……白だからしみを落とすのにさうとう時間がかかったよ）

これが、頭の中での苦笑いの理由である。

「新し〜！早くしなさいよお」

「悪い、悪い」

工藤邸のドアの前で、蘭は腰に手を当てながら新一に向かって言った。

と言うより、怒鳴りつけたと言った方が正確だろう。

蘭は頬をプクツと膨らませながら、工藤邸が出てくる新一を軽く睨みつけた。

そんな新一は、少しボサツとした髪型で工藤邸から外に出てくる。

「もう！登校初日から遅刻する気なの？それに髪の毛、寝癖が付いてる」

蘭はクスツと、哀がいつも笑うように笑った。

近くにある木がサワサワと揺れる。

まるで、木も新一のことを見て笑っているようだ。

新一は一瞬「ムッ」とした顔を蘭に向けたが、それは一瞬にして消え去った。

(アホクサツ……………)

そう感じたのだ。

「たくっ寝癖なんてどうでもいいだろう、さっ行くぞ。園子に早く来いって言われてたんだろ」

「え？ うん……」

蘭は頬をプクッと膨らませていたが、新一の一言『さっ行くぞ』でコロッと顔が変わり、なんとも可愛い笑顔となった。

ちなみに、新一が蘭との待ち合わせに遅れた理由は「寝坊」だ。

今度は本当に「寝坊」なのだ。

新一と蘭（園子）が入った大学は、帝丹大学。

小・中・高・大、と全て帝丹がついた学校に入っている。

改めて思うと、とてもスゴイ。

新一と蘭は、顔から笑みが消えることなく大学の門をくぐった。

— ほうどう —

「うわあゝ。すごい、すごいよ！ねえ、新一ってば」

蘭は目をキラキラと輝かせながら、今も「すごい」を連発していた。クリスマスに、サンタさんからプレゼントをもらった時の子供のようだ。

『わあ！サンタさんからのプレゼントだあ、やったやったやったあ』

とう感じだ。

「あゝはい、はい、はい、はい。見りや分るっつの」

新一は、呆れた顔を蘭に向ける。

「ガキか」とでも言うような顔だ。

「ククク……アハハハッ」

新一が呆れた顔を見せ、目が合ったとたんに蘭が笑い出した。

「お、おい。何笑ってんだよ」

「だ、だって！新一が「はい、はい、はい、はい。」って連発したんだもんっ……アハハハッ」

「は？何言ってるの蘭。オメエーだろ、「すごい、すごい」って連発してたのは！」

「ええー！？してない、してない」

蘭は顔の前で、手をフリフリと振る。

新一は、ジト目で蘭の顔を見つめた。

だんだんと、微生物を頑張って肉眼で見ようとしているような目つきに変わっていく。

（いや、してたから。思いつきり連発してたからな、蘭。っーか蘭、どっかネジ落としたか？こんな爆笑するかあ、普通……）

新一がそんなことを思っているうちに、蘭の笑いは止まったようだ

った。

「さっさ、どこかの席に座ろうよ」

「あ、おう」

そうして、隣同士で席に座る。

結構真ん中のほうの席だ。

周りがよく見渡せて、気持ちの良い気分になる。

そして、茶色の机が新鮮さを出してくる。

森にいるような気分だ……とまではいかないが、なかなか良い。

新一も蘭も、自然と笑顔が顔に浮かび上がってきていた。

「蘭！ 新一君も」

聞き覚えのある声が、新一と蘭の耳に響く。

「園子〜♪」

最初に声を上げたのは、蘭だった。

笑顔の蘭と園子を、新一はつまらなそうな顔で見ていた。

それはそうであろう。

蘭と園子は女。新一は男。

いくら幼馴染だと言っても、やはり女は女。男は男なのだ。

「あっ！ゴメンね、新一君。せっかく蘭と2人つきりだったのに」

園子は、いたずらっぽく新一の顔を見る。

「ちょ、ちよつと園子！何言ってるのよお。とにかく、私の隣に座って」

「うん、そうさせてもらう♪それじゃあ新一君、蘭の隣を座らせて頂きまーす♪」

園子はそう言って、ドカッと座る。

新一は、そんな園子を微生物を頑張って肉眼でみようとしているような目つきではないが、ジト目で見つめた。

「やだ園子、おばさんみたい」

「ええ?! それはないでしょー」

楽しく会話を始めた蘭と園子。

新一は、つまらなそうな顔をしてほうどうの中を眺めていた。

すごく、広い。

それに、見ているだけでさわやかな気分になるようだった。

新一は、1つ深呼吸をした。

「快斗、早く早く」

「へい、へい」

快斗と青子が、走ってほうどうに入っていく。

「うつわ〜ほとんど席うまってんじゃん」

快斗はほうどうの全体を見渡した。

しかも、敬礼をするときのような手も付いている。

「大丈夫♪絶対にどこかは空いてるはずなんだからっ」

「まあ、そりゃなあ……」

快斗の言葉が終わらないうちに、青子に腕を引っ張られ、言葉は中断する。

そのまま走る青子に腕をつかまれたまま、付いていく。

というより、引っ張られて連れて行かれている状態だ。

まるで、犬の散歩だ。

犬の散歩をさせていた快斗が犬の青子に先を起こされ、付いているロープをぐんぐんと引っ張られながらついていく。

そんな光景のようだ。

「あっ！ あった、あった。空いてる席あったよ」

「あ？おっ本当だ」

そう言って、空いている席に快斗と青子が座った。

一番はじっこの席で、丁度2席空いていた。

その2席以外は、全て人が座っている。

快斗が奥の席に座り、青子が一番はじっこの快斗の隣の席に座る。

（ふう）

座れる席が見つかり、快斗は心の中でホッと息をつく。

快斗は、ふと隣の席の人を見た。

「げっ……」

（やべやべ、つい声に出しちゃった）

快斗は、そう思いながら顔を前に向ける。

隣に座っているのは、男の人。

なかなかの美少年で、カッコイイ。

しかもよくテレビに出ているし、新聞にも載っている。

「どうしたの？ 快斗」

突然青子に名前を呼ばれ、冷や汗を垂らしながらポーカーフェイスを作る。

「なんでもねえよ」

「あっそう」

青子はそれだけ言うと、あとは何も追求せずに、持ってきた文房具をあさり始めた。

快斗はと言うと、チラッとまた隣の男の人を見ていた。

（コイツ、どうみても……クドウ シンイチ だよな。たくっ俺ついてねーな、こんなヤツの隣に座っちまうなんてよお）

快斗は、顔を前に向けて「はぁ」とため息をつく。

快斗がまだ心の中でぶつぶつ言っている中、快斗の隣の男の人「工藤新一」も快斗のことをチラッと見ていた。

（ん？なんだ、この感じ……この感じ、なんか知ってるような気がする。なんか、俺がコナンの時にも会ったことがあるような）

新一は、あごに手を当てる。

探偵モードに入ったのだ。

そんな時快斗は、心の中で「あっ」と呟いていた。

（そういえば、工藤新一って江戸川コナンだったんだよな。へえ、元の姿に戻れたんだ）

快斗は、意味なく得意げに笑った……というより笑ってしまった。

自然とそんな笑顔が浮かび上がってきてしまったのだ。

快斗の心の奥では、コナンが新一に戻ることを望んでいたのだろうか、それは快斗にしか分からない。

青子は、そんな快斗の顔を不思議そうに見つめているだけだった。

「あっ……」

新一は、あごから手を放して呟いた。

「ん？どうしたのよ新一」

「へ？いやいや、なんでもねーよだから」

新一は不思議な日本語を言いながら、顔の前で手をフリフリと振った。

なぜ「あっ……」と声を出したかというと、それはもちろん謎が解けたからである。

（そうだ、この感じ………大胆不敵で神出鬼没の大怪盗。怪盗キッドだ！）

新一も、意味なく得意げに笑ってしまっていた。

そしてやはり、そんな新一を不思議そうに見つめる蘭。

でも不思議そうに見つめていたのは、蘭だけではなかった。

見られると厄介になる人物にも、見られてしまったのだ。

「あやしいわね」

園子が、蘭にしか聞こえない声で呟く。

「え？」

園子は、一度髪を手ではらうとしやべりだした。

「あやしいって……何が？」

「新一君よ、新一君！」

園子は、軽く新一を睨み付ける。

「今、顔がにやけてたでしょ？きっと、他の女に目移りしてたのよ！」

「め、目移り？」

蘭はチラッと横目で新一を見る。

新一は何事もなかったように、ほうどう内を見渡していた。

「まったく、蘭という綺麗で可愛い奥さんがいるってのに……」

園子は机にひじをつけて、手を顔の頬に当てた。

「お、奥さんってねえ園子！そんなんじゃないってばあ」

「またまたあゝそんなこと言っちゃって」

園子はいたずらっぽい笑みで蘭を見つめる。

蘭の方は、顔を赤くして園子の顔を見つめていた。

そんな2人を新一は、チラッと見る。

そのとたん、新一の顔は「はあ？」とでも言うような顔に変わる。

それもそのはず。

新一は園子と蘭が何を話していたかなんて、聞いていない。

だから、すごく不審に見えてしまうのだ

いたずらっぽい笑みを浮かべる園子と、顔を赤くしている蘭。

でも、知らなくて良いことは、世の中にはたくさんある。

蘭と園子の話しは、そんな中の1つに選ばれたのだ。

ほうどう内が、さっきよりもガヤガヤと騒がしくなったように聞こえた。

3, 違った出会い (後書き)

読んでくださった、皆様！ありがとうございます。(≧≡▽≧)

今回のお話はどうだったでしょうか？○(・▽・) ?

多分、皆様が気になっている場面があるとしたら、それは蘭が壊れた(?) 場面ではないでしょうか？(・(エ)・)□

書いた本人の作者でも、「変」だと思ってます(汗)(「□」)でも、ちよっと書いてみたかったですよ、ああいう蘭を……………。

ですが皆様！ここで読むのを中断しないで下さい。ヽ(・○・
)ノ

ああいう蘭はこれからはあまり出てこないと思います。
普通な「あっ蘭だ」みたいな感覚になるような、蘭を出していったら良いと思っています♪

皆様、これからも「全くま」を宜しくお願いします！

評価&感想も、待っています★ヽ(。・ω・。)

4、記憶の追求

ザワザワ、ガヤガヤ、色々な音が聞こえてくる。

扉を開ける音、席に座ったり立ったりする時の音、おしゃべりをする声。

もちろん、ここは大学の「ほうどう」。

そして、相変わらず隣同士なのがこの2人。

新一と快斗。

授業が一段落したところで、休憩時間となっているのだ。

授業が始まる時間まで、まだ10分は余裕にある。

そんな中、快斗の携帯が「ブー、ブー」という音を鳴らしながらブルブルと震えだした。

同じく、新一の携帯も「ブー、ブー」という音ほ鳴らしながらブルブルと震えだす。

2人とも、メールが来ていたようで「ピッ」と押して「ピッ」と見る。

そんな時、新一はメールチェックをしていたと同時にカチンコチンに固まってしまっていた。

ある一点を見つめたまま、新一は固まってしまったのだ。

「あゝ快斗の携帯についでる、このくまのキーホルダー可愛い♪」

可愛い物好きの青子が、当たり前のように話しかけてくる。

青子は、くまのキーホルダーに微笑むようにニコニコと笑った。

快斗が携帯につけているのは、昨日寺井によって見つけられたくまのキーホルダーである。

携帯につけるほど、お気に入りらしい。

「可愛すぎるよおゝ♪青子もほしい」

「だろお！実はな、このキーホルダーは俺がガキだった頃にデザインして作ってもらったキーホルダーなんだぜ」

「エヘンツ！」と快斗は得意げな顔をして鼻で「フンツ」と笑った。

そして、くまのキーホルダーのくまの頭を人差し指で「なでなで」と言いながら撫でる。

「えー！すごいね、快斗。以外に結構センスあるんじゃない」

青子もニツコリと笑う。

快斗は「以外」の言葉に少しカチンときたが、褒めてくれていることには変わりはない為、快斗もニツコリと笑った。

ところ変わって、お隣に座っている工藤君。

今もなお、ある一点を見て固まっていた。

ある一点というのは……自分の携帯しんいちについているくまのキーホルダーだった。

新一の頭に、有希子と優作の顔が浮かぶ。

（あんにゃろー、勝手に俺の携帯にくまのキーホルダーつけやがったな！！こんなの見られたら、恥っ恥っ恥っ！はやく取らねえと…）

新一は、冷や汗を垂らしながらくまのキーホルダーに手を伸ばす。

「あー何これ！？新一ってこういうキーホルダー好きだったりするんだあ」

「えーどれどれ？わあ本当だ、こりゃ大スクープね」

一番見られたくない人に見られてしまった、新一はそんな顔を無意識のうちにしていた。

もちろん、声の主は 蘭&園子だ。

「だぁー違う、違う、違う！これはな、俺の母さん達が勝手に……」

まあ、そんなことを言っても蘭と園子には通用しない。

ただの言い訳としか執ってくれないのだ。

新一は、かすかに苦笑いを浮かべた。

そして、隣の快斗は今なお得意げな顔をしていた。

トン チャ

新一は微かに頬を赤く染めながら、蘭と園子の手が届かないところの机に置携帯を置く。

快斗も、自分の携帯をそっと机に置いた。

その為、 トン チャ という音がしたのだ。

それより、音のことよりも置いた場所の問題だ。

新一も快斗も同時に携帯を置いたため、隣同士に携帯が置かれたのだ。

そのとたん、2人の目線は1つの物にしぼられる。

もちろん、2人の目線の先にはお互いの携帯についているくまのキーホルダーだった。

（これ……俺のくまのキーホルダーにそっくりじゃねえか。こいつ……っ！まさか、母さんが言ってた クロバ カイト か?!）

新一は、チラッと快斗の目を睨むように見る。

もちろん、睨むつもりなどまったく無い。

（ななななな、なんでえ。世界に1つしかないはずのくまのキーホルダーを工藤新一が持ってんだよ?!）

快斗は「げええええ」とでもいうような顔を、ほんのりと浮かべてチラッと新一の顔を見た。

2人はくまのキーホルダーから目線をはずし、お互いの瞳を見つめあう。

（こりゃあ、聞いてみるっきゃねーな）

新一は不適な笑みを浮かべる。

（こりゃあ、怪盗キッドの服についたしみぬきよりも大変な問題だな……）

快斗は、「どこからでもかかって来い！」とでも言うような表情で新一を見つめる。

そんな2人の光景を、蘭・園子・青子は目をパチクリしながら不思議そうに見つめていた。

4、記憶の追求（後書き）

読んでくださった皆様、本当にありがとうございます★

今回は、どうだったでしょうか？（；´Д｀）といっても、まだあまりお話しが進んでいないので良く分かりませんよね？

では、今回はなぜ！！（。ω、ー）っこのお話しの題名が「全てはくまから始まった」になったのかを説明したいと思います。

「そんなの聞きたくなぁ〜い」（¬¬）という方、ここの部分はスッ飛ばして下さいね。

まず、なぜ「くま」というと単に作者の私がキャラクターの「くま」が好きだからです。ポッ（。ー（エ）ー。人（。ー（エ）ー。）ポッ

それで、「くま」に関係があるお話を書きたいなぁと思ひまして、色々題名ねった結果。。。。。

「全てはくまから始まった」

になったんです♪

という、なんとも普通な理由なんですネ。。。。

というか、普通なんでしょうか！？（（（；；；Д；；；））

皆様、こんな作品ですが、評価&感想を書いて頂けると、作者がものすごく喜びます！ワー。。。。ゞ（○・ω・）ノ。。。。+

なので、ぜひ！宜しくお願い致しますネ。○（・ω・＊）○

5、それぞれの真実

「あのー……」

数秒たつと、快斗が最初に新一に問いかけた。

「東の高校生探偵の工藤新一さんにお聞きしたいことがあるんですけど、少しお時間頂いてもよろしいでしょうか？」

「いいですけど。ちなみに、今はもう高校生探偵ではないので……」

快斗は「アッ」とでも言うような顔を一瞬浮かべたが、またすぐにポーカーフエイスを保つ。

「そうでしたね、では大学生探偵の工藤新一さんでいいですね」

（大学生探偵かよっ……）

快斗の言葉に、新一は心の中で苦笑いをする。

そして、2人は席から立ち、ほうどうから出て行った。

もちろん、くまのキーホルダーが付いた携帯を持って………。

そんな新一と快斗の後ろ姿を、蘭・園子・青子は呆然しとて見ていた。

「ねえ蘭、あの2人って知り合いなの？」

「さ、さあ〜」

蘭と園子は、新一と快斗の後ろ姿から青子の顔に視線を向ける。

すると、視線に気が付いたのか青子も蘭と園子の方に視線を向けた。

数秒の間が空いた。

新一と快斗は、ほうどうを出てすぐそばにある椅子のような物に腰かけた。

丁度、2席空いていたのだ。

「あの一…」

また、快斗が最初に新一に問いかける。

「このくまのキーホルダーに似たような物、携帯につけてますよね」

快斗は、自分の携帯に付いているくまのキーホルダーを指差しながら言った。

そして、人差し指でトーンと弾く。

「ああ、お持ちです」

そう言って、新一も携帯についているくまのキーホルダーを指差した。

新一と快斗はそれをじっと、自分のと相手のと交互に見つめ始めた。

「違うのは、くまのキーホルダーのくまに付いているアルファベットのマーク……みたいですね。東の高校……東の大学生探偵の工藤新一さんの「S」ですけど僕のは「K」です」

新一は、快斗の瞳を見てゆっくりと頷いた。

それからというものの、新一も快斗は黙ってしまった。

なぜなら今、新一も快斗も頭をフル回転させている最中なのだから。

新一はというと……。

（アルファベットしか変わらないこのくまのキーホルダー。やっぱり母さんが言ってたくまのキーホルダーなのか？って……それを聞こうと思ってここに来たんじゃねーか。何やってんだよ、俺）

新一は、「ギリギリセーフ」とでも言うように心の中で苦笑いをした。

あと少しで、顔に苦笑いが出てしまうところだった。

そして、快斗はというと……。

（うーん……俺がデザインしたくまのキーホルダーと、アルファベット以外まったく同じのくまのキーホルダー……。まあ、頭ん中で考えるよりもこういうことは聞いてみるっきゃねーな）

新一も快斗も、頭の中で考えがまとまると同時に口を動かした。

「あのさあ……あつ」

新一と快斗の声が、綺麗に重なる。

「東の大学生探偵の工藤新一さん、先にどうぞ」

「いえいえ、どうぞ先にしゃべって下さい」

内心、新一も快斗も自分が先にしゃべりたいとは思っているのだが、初対面の相手となかなかそれは難しい。

「東の大学生探偵の工藤新一さん、先にしゃべりなよ」

「じゃ、じゃあ……」

快斗の言葉が、ちょっと敬語から外れていたのはおおめに見よう。

新一は、数秒の間を空けてから話し始めた。

「4才位の時に、公園のジャングルジムのでっぺんでこのくまのキーホルダーを僕にくれたのはあなたですか？」

新一は、くまのキーホルダーを指差す。

「へ？」

新一の話を聞いて、一気に快斗のポーカフェイスの顔が崩れる。

今まさに、快斗の瞳は 点 状態だ。

（んなことあったけかなあ？記憶のどこにもねーぞ、おい）

快斗はそう思うと

「いえいえ、この黒羽快斗の記憶の中にはそのようなことは一切無いと思います」

と胸を張るように一息で言った。

そして、ポリポリと意味無く頭をかいた。

快斗の答えに、新一は軽くため息をつく。

「そ、そーなのか？」

「はい、そうです」

「そうですか……」

「はい……」

「……………」

「……………」

数秒の間が空く。

それから、「あっ……」という顔を一瞬して、新一が口を動かした。

「あっ……そういえば、このくまのキーホルダーをくれた子の名前、あなたと同じのクロバカイトだったはずですよ」

新一は、軽く椅子に座り直す。

「まじ、ですか？」

「はい、まじです」

「まじでじま？」

「まじでじま」

「でじまさん？」

「いえ、工藤さんです」

また、数秒の間が空く。

快斗はまた、ポリポリと意味無く頭をかく。

（おいおいおい、本当に俺の記憶の中に無いんですけど……。でも、このくまのキーホルダーすんげえ似すぎだし、俺とくまのキーホルダーをくれた子の名前が同じだって言うし。ああ、分っかんねえなあ、コイツ、俺の頭を潰す気か！？）

快斗は心の中で呟く。

快斗は、「フンッ」と荒い鼻息を出すとペラペラとしゃべりだした。

「あ、あのですねえ」

「はい？」

新一は、かすかに首を傾げる。

「このくまのキーホルダーはですね、僕が小さい頃……………3・4才の位の頃に自分でデザインして、お店で作ってもらったくまのキ

「ホルダーなんです。つまりですね、このくまのキーホルダーは世界に1つしか無いはず、なんです」

「は、はい……」

新一は、苦い愛想笑いを浮かべる。

「えー……ですから、なぜ、世界に1つしかないはずのくまのキーホルダーをなぜ東の高校生探偵の工藤新一さんが持っているのかが不思議なんです。でも、東の高校生探偵の工藤新一さんあなたは、このくまのキーホルダーを僕から持ったかもう言うんですよね」

快斗は、完全に探偵気分で一気にしゃべった。

「ああ、まあそうですね。ちなみに今は高校生探偵ではありません」

「あつ、そうでしたね。ハハハ……すみません」

快斗がわざとらしい笑う。

でもそんなこと新一は気にせず、腕を組んで考えはじめた。

快斗も、そんな新一を見てわざとらしい笑いをやめて、腕を組んで考えはじめた。

（俺が思うに、目の前にいる黒羽快斗がくまのキーホルダーをくれた人だと思うんだよな。まあ世界には他にも、黒羽快斗って名前の人はいそうだけど………なんか今日の前にいる黒羽快斗がそうよなうな気がするんだよな………）

新一はそう思うと、クシヤクシヤと髪を掻いた。

（ああ〜なんで、なんで、なんでなんだよ！くまのキーホルダーは世界に1つしかない、はず………だよな？って聞いちゃダメだろうが）

快斗は軽くため息を吐く。

その時、新一と快斗の前に見慣れた3人の姿が現れた。

もちろん、蘭・園子・青子の3人だ。

「新一、もう授業始まるよ」

「奥さんがそう言ってるんだから、はやく戻るわよ」

蘭と園子が腰に手を当てて新一の前に立つ。

というか、立ちはだかる。

新一は苦笑いをしながら交互に蘭と園子の目を見た。

そして、椅子のようなところから立ち上がる。

「ちょ、ちょっと園子！奥さんじゃないっていつも言ってるでしょ」

園子は「イヒヒ」といたずらっぽく笑った。

「快斗、あと少しで授業が始まっちゃうよ。はやく行こう」

「え？ああ」

快斗も、椅子のようなところから立ち上がる。

「青子ちゃん、行こうよ」

「あつ、待ってよ。蘭ちゃん、園子ちゃん」

青子は、笑顔で蘭と園子のほうへ駆け足で向かう。

「ねえ、青子ちゃんって何高校だったの？」

「青子はね、江古田高校だったよ」

「私達は、帝丹高校だったんだ」

蘭・園子・青子は幼馴染のように親しげに話しながらほうどうへ向かって歩いていく。

蘭と園子が親しげに話しているのなら分かるが、会ったことがないはずの青子も親しげに話しているのは、とても不思議な光景だ。

新一と快斗がほうどうを抜けている間、蘭・園子・青子の間に一体何があったのだろうか。

新一と快斗は、蘭・園子・青子の後ろを並んでほうどうに帰っていく。

（たくっ、蘭と園子のやつ……いつ仲良くなったんだよ……まあ、俺達が抜けてる間に友達になったんだろうけど）

新一は、心の中で苦笑いを浮かべる。

（つーか、仲良くなんのはやくねーか？普通こんなもんか？）

快斗は、心の中でため息をつく。

そして、新一と快斗は同時にこう思った。

（女って、良く分かん）

5、それぞれの真実（後書き）

読んでくださった皆様。ありがとうございます★

いつもいつも、感謝しております。+・○○°・（○）,・

、ω、・）人（,、—、ω、—）○）.°。○○°。+

それですね、もう口癖のように言っているような気がするんですけど……

「今回はどうだったでしょうか？」

の通り、どうでしたか？（°・（x）・）ノ？？

あのっ、はっきり言って笑えちゃったりしますか？

「くすっ」程度でも良いんで………（≡≡≡°。）

ってなてなコトですので、評価&感想の方宜しくお願いします!!
そして、更新はゆるゆっくりですが、今後も「全くま」をヨロシク
お願い★、（○、・v・）人（・v・、●）ノ

6、勘違いから始まった友

新一と快斗がほうどうをぬけている間、女の子3人の間ではこんなことが起こっていた。

新一と快斗がほうどうを出て行くと、蘭・園子・青子は意味無しに、お互いに愛想笑いを浮かべていた。

それから数分、ずっとそのままの状態で何もしゃべらない。

そんな沈黙を破ったのは、蘭だった。

「あ、あのー……」

蘭が青子の瞳をしっかりと見て話しかける。

園子は、蘭と青子の顔を交互にうかがった。

「あつ、はい」

青子は、椅子に座りなおす。

「さっき、この2席に座っていた人が一緒にほうどうを出て行きました、よね？」

蘭は、新一と快斗が座っていた席を軽く指差す。

園子は、蘭の言いたいことが分かったのか園子がかわりに話し出した。

「それでね、左側に座っていた男は私達の連れっというか、友達っというか……恋人」

園子はそう言ってチラッと蘭の顔を見た。

蘭は、「変なこと言わないでよ!」とでも言うような眼差しで園子の顔を見ていた。

そして、園子は顔を青子の方に戻すとまた話し出した。

「それで、右側にいた人はあなたの友達とか恋人とかの人でしょう」

「えっ、こ、恋人なんかじゃないです!ただの、幼馴染で……」

青子は、顔を赤くしながら答えた。

そんな青子の顔を見て、園子はいたずらっぽく笑う。

「もう園子！余計なこと言いすぎ。あつそれでね、一緒にほうどうを出て行ったってことは……あの2人は友達なんじゃないかと思うの」

蘭がそう言ったとたんに、青子の顔がパツと明るくなる。

「うんうん、実は青子もそう思ってたの」

青子は園子と蘭の顔を交互に見ながら、笑顔を作った。

「あつ、中森青子。よろしくね」

「よろしく、青子ちゃん。私は毛利蘭。そして、私の親友の……」

「鈴木園子です」

園子は、蘭の後ろからVサインを出しながら言った。

そして、3人でニツコリと笑う。

「あつそうそう。ねえ、青子ちゃん。青子ちゃんと一緒に来てた人、さっきは幼馴染とか言ってたけど……本当のところはどうなの、好きだったりしちゃう？」

園子はまたいたずらっぽく笑う。

蘭も、興味があるようでニコツと青子に向かって笑っていた。

青子の顔はどんどん、どんどん赤くなっていく。

「な、何言ってるの園子ちゃん！ただの幼馴染って言ったでしょ。それ以下でもそれ以上でも無いの」

青子は、キッパリと言い切る。

「それに、一緒に来たのはただのバ快斗なの。あつ、黒羽快斗って名前なんだ」

「へえ、私達と一緒に来たのはね、元東の高校生探偵の工藤新一。し・か・も、予約済み♪」

園子はチラッと蘭を見る。

「ええ！？あの人って、工藤新一だったんだ。しかも予約済みって……もしかして蘭ちゃんの？」

青子がそう言ったとたんに、蘭の顔が赤くなっていく。

「ち、違うってば！園子も青子ちゃんも。……あ、ああ！ほ、ほら時計を見て見てよ。もう、こんな時間だ！新一と快斗君を呼びに行かなくちゃね、さあ行こう」

蘭はわざとらしくそう言うとかタツと席を立った。

園子と青子は、蘭の行動を見てクスクスと笑っている。

「ほ、ほらあ！笑ってないで、スタンダアップ Stand up！」

「もう、分かったよ蘭ちゃん。行こう、園子ちゃん」

青子もガタツと席を立つ。

園子は青子に言葉をかけるかわりに微笑んで、ガタツと席を立った。

そして、蘭・園子・青子はほうどうから出て、新一と快斗を呼びに行ったのである。

新一・蘭・園子・快斗・青子はやっとほうどうへと戻って来た。

が、明らかに席順が違う。

さっきまでは、園子・蘭・新一・快斗・青子の席順だったのだが、青子が蘭と園子と仲良くなったため、席順が園子・蘭・青子・快斗・新一となった。

そんな中、快斗が青子に話しかけた。

「なあ青子、その青子とは違ってものすごく可愛くて綺麗な2人と知り合いなのか？」

快斗がそう言うと、青子は額に小さな怒りマークをつけながら、ニッコリと笑った。

「青子と違ってみのすごく可愛くて綺麗なこの2人とは、さっき知り合ったんだよ」

「ふーん」

快斗は軽く返事を返すと、蘭・園子の顔を見る。

蘭と園子の2人の目が、交互に合う。

「青子の隣の青子と違ってものすごく可愛くて綺麗なお2人さんは、本当に青子とお知り合いで？」

快斗は、丁寧な口調で蘭と園子に話しかけた。

「快斗、青子って名前入れすぎでくだいんですけど………」

青子は呆れた表情を思いっきり快斗に向ける。

「うるさい、うるさい。アホ子は黙っとけ」

「なっ、青子はアホ子じゃないよ！このバ快斗」

「あん？だ〜れがバカだって、アホバカのアホ子さんには言われたくないね〜」

「青子だって、カッコツケのアホバカマヌケのバ快斗さんなんかに言われたくないもんっ！」

蘭・園子、ついでに新一は2人のケンカを少し不思議そうに見つめていた。

まったく、止めるスキが無い。

「たくっピラピラのスカートはきやがって、見るぞ！」

「どうぞ〜ご勝手に。今日は金魚柄なんだぁ〜♪」

「き、き、きき金魚！？あ、後で罰が当たるぞ」

「当たらないよーだ！」

青子は、ベーと舌を見せた。

快斗はものすごく悔しそうな顔を青子に向ける。

「し・か・も、快斗はさあ、ちよつとマジックが出来るからって怪盗キッドの肩持ちちゃって！」

「怪盗キッド反対！な〜んてやってんのは、アホ子とヘボ警察くらなんだよ」

「警察はヘボなんかじゃないよ！いつかお父さんがねえ、怪盗キッドをグルグル巻きのペチャンペチャンにしてやるんだから！」

「ケッ、出来るもんならやってみろってんだあ」

ケンカが止まる気配はまったく無い。

「△△△△△×××××！」

「×××××○●×××！」

「●×△☆×！！」

「□□☆☆×●○×！！！」

長いケンカも終盤に入ったのか、ケンカから話題がパツと変わる。

「あっそうだ、そこのお2人さん先程の質問に答えて頂いても良いですか？」

快斗が笑顔で問う。

「あっ、青子ちゃんと私達が知り合いなのか？って質問だったよね」

蘭もニコツと微笑む。

でも、蘭と園子はさっきとうって変わって、満面な笑みの快斗と青子を見て微笑みながらもクスツと笑っていた。

「私と園子は小さい頃からの親友だったんだけど、青子ちゃんとは

今日ここで初めて知り合って、友達になったよ」

快斗は何も言わずに、うんうんと5回も頷いた。

「ふーん、女って知り合いじゃない人にバンバン話しかけるんだな」

今まで黙っていた新一が、やっとしゃべり出した。

蘭・園子・快斗・青子はパツと新一の方に顔を向けた。

向けた時の顔は、ご機嫌な笑顔から不機嫌な顔に変わっていた。

「バンバンってねえ、そんなじゃないわよ！ただ、新一と快斗君が友達みたいだったから、私達も仲良くしようって感じで友達になったんだからね」

蘭がそう言うと、新一と快斗はパツと蘭の顔を見た。

「え？な、何よ……………」

蘭は新一と快斗の目を交互に見つめる。

園子と青子も、蘭・新一・快斗の顔を順番に見つめていた。

「なあ蘭。すんげえ勘違いしてるぞ」

「うんうん、俺もそう思う。ちなみに、蘭ちゃんって言うんだあ。
可愛い名前」

新一は軽く快斗を睨みつけた。殴りたい位だったが、そんなことは出来ない。

今日、初めて会ったのだから。それに、蘭達と違って友達になったわけでもない。

だから、殴りたくても殴れないのだ。

快斗は、その視線に気付いていたのかいなかったのか、それは快斗にしか分からない。

「え？快斗、それってどういう意味？」

「だから、この工藤新一さんとは友達でも知り合いでも腐れ縁でもブーちゃんでも無い！」

快斗は言い終わると、フツと鼻を鳴らした。

「ねえちよつと快斗。ブーちゃんって何？」

「ん？ブーちゃん？俺が昔飼ってたブタの名前」

快斗はカッカとブタの鳴き声のまねをした。

「えー！快斗、ブタ飼ってたんだあ」

「話しそれるから、ブタの話しはまた今度。で、本当に工藤新一さんとはなんでもないから」

快斗は肘を机につけ、手を頬に当てた。

「じゃあ、今から友達になれば良いじゃない」

蘭が、新一と快斗の瞳を交互に見つめながら言った。

「そうよ！蘭の言う通り」

園子は、パチンツと指を鳴らす。

新一と快斗は、蘭と園子の話しを聞いて、目をパチクリさせた。

「快斗君、あたしは毛利蘭。宜しくネ」

「実は蘭ちゃんって、名探偵の眠りの小五郎の娘なんだよお」

青子は、「すごおい」と手をパチパチと叩きながら言った。

「へえ、あの眠りの小五郎の……」

快斗はいかにも興味がなさそうな顔で、青子を見た。

「何よ、その顔」

「別に……」

「何よ、その顔」

「だから、別に……」

青子はプクッと頬を大きく膨らませる。

「なんか快斗、ノリ悪い」

「のりたかねえよ！こんなアホ子さんなんかにい」

快斗は「しっしっ」と虫を払うように青子に向かってやった。

「あ、あたしは鈴木園子。鈴木財閥って知ってる？自分で言うのもなんだけど、あたしその娘なのよ。アハハハ」

園子は、快斗青子の間に無理矢理入り込んで快斗に自己紹介をする。

「へ？あ、ああ鈴木財閥ね、とっても良く知っております♪」

快斗はニカッと笑って、ブイサインを園子に見せた。

「あつ、新一君。あたし、中森青子！よろしくネ」

「あ、ああ、よろしく」

快斗は、青子をジト目で見ると

「コイツ、あのヘボ警部の中森銀三の娘」

と言って、人指し指で軽く青子を指差した。

「あつ、やっぱり娘さんだったんだ」

「うん！だったの」

青子は優しい笑みを浮かべる。

「でも快斗、あたしのお父さんはヘボ警部なんかじゃない！って前から言ってるでしょ」

「知らねーよ、んなもん。いつもKID^{キッド}に逃げられてるくせに」

「そ、そんなことないもん！宝石はちゃんと取り返してるでしょっ」

「取り返すってなあ、あんなのゴクタマだろ。たまあゝにしか取り返してねえじねえか」

「たまあゝにでも、ゴクタマでもスゴイものはスゴイのよ！」

「はいはいああそうですか。そのくらいでスゴイだなんて、あのヘボ警部もヘボだなあ」

「ちょっと快斗、日本語になってないよ！」

「アホ子さん、日本語分るんだあゝすごいでちゅねえゝ」

「なっ、バ快斗おー！」

「アホバカアホ子！」

新一・蘭・園子の3人は、快斗と青子の様子を苦笑いをほんのり浮かべながら見つめていた。

まあ、そうこうして。

この2人、新一と快斗は友達になり、蘭・園子・青子・新一・快斗も友達となったのである。

でも2人は、このようなかたちで偶然友達になれただけ。

くまのキーホルダーで友達になったわけではない。

蘭・園子・青子の勘違いのおかげで友達になることが出来たのだ。

最初の授業が始まったようだ。

だんだんと辺りがシーンと静まっていく。

「では、ここの数式を見て下さい」

授業は、数学のようだ。

6, 勘違いから始まった友(後書き)

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

いやいや、89日も投稿していなかったとは。。遅れてすみません
つつタタタタ・・・ε||ε||へ(;●・'ω・)ノ
勉強やら部活やらで、ドタバタしてまして――〇

えーっと、今回のお話しは全て女の子ですねッ!

普通、こんなふうには仲良くなるんですかね??

書いた自分でも、良く分かりませんヾ(㉿ ; ●)

そんな私が書く全くまでですが、今後とも宜しくお願いしますね♪

7、明かされた真実〜快斗編〜

「おかえりなさいませ、快斗ぼっちゃま」

家のドアを開けると、寺井が柔らかな笑顔を浮かべて出迎えた。

「ああ、ただいま。寺井ちゃん」

快斗も、寺井に柔らかな笑顔を浮かべる。

つもりだったようだが、ニカッと下品に笑ってしまった。

そんな快斗は、額をちょっとポリポリとかいてから寺井の目をしっかりと見る。

「寺井ちゃん、1つ聞きたいことがあるんだけど」

「はい、何ですか？」

2人は、家の玄関の前でゆっくりと話し出した。

快斗は、バッグの中から携帯を取り出す。

もちろん、くまのキーホルダーが付いた携帯だ。

「昨日、寺井ちゃんがこのくまのキーホルダーを見つけてくれただろ。このくまのキーホルダーについて、何か知ってるか？なんでもいいんだけど」

寺井は少し考えた後、「あっ」と声を漏らして話し始めた。

窓が風でカタカタと揺れた。

「そのくまのキーホルダーは快斗ぼっちゃまが小さい頃に自分でデザインして作ったキーホルダーです。そのくまのキーホルダーは、世界にたった……2つしかない宝物だと盗一様がおっしゃってありました」

快斗と寺井の間に、数秒の間が空いた。

「へ？お、おい寺井ちゃん。もう1回言ってくれない？」

快斗は人差し指で1という数字の形を見せながら言った。

「は、はい。そのくまのキーホルダーは快斗ぼっちゃまが小さい頃に自分でデザイン……」

「ああ、それよりも後、後。それよりも後に寺井ちゃんが言った言葉だよ」

快斗は必死に手を横にフリフリする。

「え、えつとですね……あつ。世界にたった2つしかない宝物だと盗一様がおっしゃっておいりました」

また、快斗と寺井の間に数秒の間が空いた。

「あ、あの寺井ちゃん。もう1回REPTAレプタしてくれる？」

「は、はい。世界にたった2つしかない宝物だと……」

「やっぱりもういいや」

快斗は寺井の言葉をさえぎり、なにやら考え出した。

（つてことは……あの東の高校生探偵のじゃなくて、東の大学生探偵の工藤新一が持っていたくまのキーホルダーは、俺が工藤新一にあげたってことか？）

快斗は、あごに手を当てて考え始めた。

「ぼ、ぼっちゃま？」

「あ、ああ悪い。その世界に2つしかないくまのキーホルダーの1つは誰が持ってるか分かる？」

寺井はまた「うーん」と何分か考えた後、やっと口を開いた。

「えー確か、シ、シイ……シン、シンシ、シンイ……あっシンイチという名の少年だったと思います」

寺井がそう答えたとたんに、快斗の目は点状態になっていた。

「し、し、しんいちだとおおお」

「ぼ、ぼっちゃま？」

快斗の足元にあったバッグがパタンと倒れた。

「あっそうでした。思い出しましたよ、ぼっちゃま」

寺井が手をポンツと叩いて快斗の顔を見た。

快斗は子供のように首をかしげた。

「快斗ぼっちゃまは、シンイチという名の少年と公園で会ったものすごく仲良くなったと聞いています。わざわざ青子様のお誘いを断ってまで遊ぶ位だったんです。ですが……」

ここで寺井は、一旦言葉を切った。

「寺井ちゃん、ですが……なんなんだよ！」

「あ、ああはい。ええと……あつ、ですがある日。快斗ぼっちゃまは引越すことになってしまったんです。快斗ぼっちゃまは引越すのが嫌で嫌で、何度も「引越さないで」と盗様をお願いしていた位だったそうです。ですがやはり、快斗ぼっちゃまの願いは叶わず引越すことになってしまったのです」

寺井は、寂しげな表情を浮かべた。

「だから俺は、引越す前にしんいちって人にくまのキーホルダーを渡したのか」

「はい、そうでございます」

快斗は口元に柔らかな笑みを浮かべる。

「俺、いい奴だな」

「は？」

快斗は、寺井に不思議な言葉を残して自分の部屋へと向かった。

（つてことは、寺井ちゃんが言ってたシンイチはやっぱりあの新一
つてことだよな。つてうわっ！俺メチャクチャ最悪なことしてるじ
やねえか。記憶にないとかなんとか言っちゃまったし……うっわああ
あー怪盗KIDで宝石を盗むよりも悪いことしちゃったよ、俺）

快斗は、ガツクリと肩を下げる。

コンコン コンコン

そんな時、快斗の部屋のドアがノックされた。

「寺井ちゃんだろ？鍵かかってないから、入ってきていいよ」

快斗がそう言うのと、予想通り寺井が入ってきた。

「もう1つ、思い出したことがあったんです」

「ん？何々、言ってみっ」

快斗はベットから立ち、寺井の傍に寄った。

「はい、快斗ぼっちゃまはシンイチと言う名の少年の母親にも会ったことがあるんですよ？確か名前は、工藤……有希子でしたっけ？盗一様と一緒に会われたのですよ」

寺井がそう言うのと、快斗は柔らかく微笑んだ。

「そのことなら、知ってるよ」

「え？」

快斗の表情は、柔らかい笑みから得意げな笑みに変わる。

「その時のことは、一度も忘れたことはないよ。シンイチって少年の母親だってことは初耳だけどネ」

そう言って快斗は、部屋から出てリビングの方に向かっていった。

快斗が出て行った部屋の空気はきつと、「？」でいっぱいだっただろう。

もちろん、寺井の頭の中にも「？」がいっぱいのはずだ。

快斗はリビングに行って、テレビをつける。

『気象情報です。明日は、高気圧が……』

テレビをつけると、丁度気象情報が始まったところだった。

だが、快斗はテレビの言葉を聞いているわけではない。

決意をしていたのだ。

（よしっ！明日、何がなんでも駆けずり回って工藤新一を見つける。怪盗KIDの服にしみが付いたって、明日はすぐに大学に行く。決定！）

快斗は、少し辺りを見回してから大きく大きく、ガッツポーズをした。

7, 明かされた真実く快斗編く(後書き)

読んでくださった皆様、いつもいつも有難うございます♪

今回はですね、作者が超☆お気に入りシーンがあるんですよ。

・ω・ーノ

まあ、そんなのどうでもいいですね(汗) o ⊥ *、 D、 * ⊥ o

えーとお、今回はちょっとお話しが短いですねッ

でも、楽しめたんじゃないでしょうか!?(ゞ(※ゝω・※)ノ

今後ともとも、よろしくお願いしますね!。+。(p・ω・。q
+・。

8、明かされた真実と新一編

ガチャリ

ドアのノブをまわし、ゆっくりとドアを開けて、新一は工藤邸に足を踏み入れる。

「ただいま」

「おかえりい、新ちゃん」

「おお新一、大学はどうだ？」

家の入った瞬間に新一に向かって一直線に飛んでくる、言葉、言葉、言葉。

新一は、思いつきり顔をしかめた。

といつても、そんな新一の顔は優作と有希子には見えていない。

なぜなら2人は、リビングにいる為。

新一はまだドアから続く廊下を歩いているのだから。

「はーいおかえり」

リビングに続くドアを開けると、改めて有希子がV^{ファイ}サインをしながら言葉を放つ。

優作はというと、新一の顔をひとめ見たとたんにクスクスと笑い出した。

「へ？ なっ、何笑ってんだよ」

「ククク……新一も見るがいい、コレ」

優作は今もクスクス笑いながらコレを新一に手渡した。

「あん？」

受け取った瞬間、新一の顔が青ざめる。

そんな時には、優作は我慢できずにアハハハと大笑いを始めた。

優作から手渡された物は、紙だ。

ペラペラのたった1枚の紙だった。

「こ、こ、これ、れこ、俺が小学1年生の時の……………」

「はっはっは、新一。動揺しているぞ。いつものポーカーフェイスはどうした？ポーカーフェイスは♪しかも、れこってなんだ、れこって」

新一は、その紙をじっと見つめながら悔しそうな表情をする。

「新一、中身は見ないのか？そおかそおか、父さんに読んで欲しいんだな。よおし分かった父さんが読んでやろう」

優作はそう言ってパツと新一から紙を奪い取った。

「わっおい返せっ！って読んでくれなんて一言も言っていないしっ」

「まあまあまあ、落ち着け新一」

有希子は2人のやり取りを見てクスクス笑いながら、紅茶を口に入れた。

窓がカタカタと揺れた。

「よし、読むぞ」

優作はそう言って1回咳払いをし、ノートの1ページ目を開いた。

「どれどれえ……。おっ作文みたいだなあ。」

— 1ねん生の おもいで — 1年A組工どうしん —

ぼくが、1ねん生で一ばんたのしかったのは、友
たちのみんなととんくり

をひろったことです。

それから、木にのぼったことです。

木にのぼったときは5回くらい、おちそうになりました。

でも、おちませんでした。

そのときぼくは、おれはなんてつよいんだ!!とおもいました。

2ねん生になっても、つよいといいです。

ほかにもおもいではたくさんあるけど、ここまでにしておきます。

とてもたのしい、一ねん生でした。

だって

よおゝ新一♪」

「良いじゃないの新ちゃん、可愛くてえ♪」

「良かねえよ!!」

新一は思いっきり有希子を睨みつける。

「ハハハ、新一。これ文字が間違ってるぞ。友達＞トモダチ＜だろ友たちになってるぞ、点が無いぞ。おっ、どんぐりもとんくりになってる。ハッハッ、文章力ないじゃないか」

優作はケラケラ、ケラケラと笑う。

「う、うるさい！」

「まっ、良くここまで成長したもんだな。新一、偉いぞ」

「んなこと言われたって嬉かねーよ」

新一はフンツと鼻で笑う。

「あっ、そうだ母さん。今日大学で会ったよ。」

「会ったて誰に？もしかして、有名人とか！？やあゝ気になるっ誰だれ？」

勝手に盛り上がる有希子に苦笑しながら、新一が続けた。

「クロバ カイト だよ」

「えっ！？あ、あの……快斗君？」

「さあ……」

新一はそういうと、快斗と話したことを具体的にまとめて話した。

新一が話し終わると、有希子は得意げな顔をして言った。

「ふうん、そのクロバカイト君はどう考えても、明日考えても、あの黒羽快斗君ね」

「明日ってなんだよ……ってかその黒羽ってヤツは違うつつってんだぜ？」

今も得意げな顔をしている有希子に向かって、新一は大げさにため息をついた。

「もお、何ため息ついてるのよ！絶対、絶対そうなんだからあ」

新一が何かしゃべろうと口を開いた瞬間に、今まで黙っていた優作が口を開いた。

「なあ、有希子。根拠はなんだ」

「こ、根拠？そ、そ、そんなの決まって……」

有希子は、数秒の間を空けてから叫ぶように言葉を解き放った。

「女のかんよ!!」

「これだよ」

新一と優作は、苦笑いを浮かべる。

（俺の母さんって、こんなに変な人だったっけ？）

こんなことを考えた新一は、自分に苦笑しながら足早に部屋に向か

った。

8, 明かされた真実〜新一編〜 (後書き)

皆さん、お久しぶりです☆ (●。▽。ノ
そしてそして、読んでもらって光栄です。

ありがとうございます。・+∴。(ノ^▽^ノ ∴
+∴。

いやいや、ものすごい日にちが空きましたね。

書いてる自分も驚きです♪
で、

しかも話しが短い、、。

まさに、どんだけえゝみたいなの♪

すいません。

まあ、そんなこんなな「全くま」ですが…………
今後とも、宜しく願いします☆ | x | - - * -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9425b/>

全てはくまから始まった

2010年10月9日06時33分発行